

モダンデザインの背景を探る アヴァンギャルド住宅出現にみるクライアント像—その2—

塚口眞佐子

Behind the Evolution of Modern Design: Research and Analysis on the Clients of 1920's Avant-Garde Houses
Tsukaguchi, Masako

I. はじめに

モダンデザインの波及過程の1920年代の代表的住宅には共通した施主像が検証される。革新的な自身の社会的・芸術的・政治的立場を住宅で表明する姿勢、変則的な家族像である。彼らは伝統に逆らい、建築家と協同しモダン住宅を出現せしめたのである。公共建築とは違い、ユーザーの同意がなくては作品は生まれない。前回に続き、代表的アヴァンギャルド住宅の施主像、生活意識や社会観と住宅との関係、設計プログラムを俯瞰の後、パラダイム・シフトとなるワイゼンホフ・ジードルンクの実情を探り、最後に新奇なデザインの許容には不可欠な過渡期のクライアント像を見る。つまり労働者階級向けのデザインが、知的な中上流階級の住宅デザインとして認知され始めた経過である。モダン住宅の出現と波及の必然的背景を論じたい。

II. 各論 (前稿に続く)

■ ガルシェのヴィラ (1926-28) コルビュジエ設計

ガルシェのヴィラの概観

パリ西方に建つ2家族住宅で、サヴォア邸の前哨作となるモニュメント性を漂わせる。単純化され閉じたファサードは、最上階中央の張出しテラス以外はフラットで、2F 3Fとも水平連続窓が側面に回る。対照的に裏面は凹部のテラスと外階段が突出し、表とは異なり奥行きのある動的表情である。

内部は、2Fが主室と厨房、テラス、3Fは寝室、屋上は寝室とテラスである。柱のリズムが目立つ均質空間で、視野の広がりやシークエンス性が意図されている。2家族への空間配当など、平面計画も通常ではない。

サラ・スタインとガブリエルの人物素描

依頼主側は何れもユダヤ系の、富豪のスタインとその画家の妻サラ、左派の政治家の前夫人で富豪のガブリエルの3名である。富豪の面々が、いかにして厳しすぎるほど簡素な住居に至ったのか。家族像がヒントとなる。スタインの弟レオは前衛アート収集家としてパリの中心的存在で、その美術館がスタイン邸でサラも役割を担う。サラとガブリエルはクリスチャン・サイエンスが契機になり、設計の10年前に出会う。2人の絆が共同住宅の強い動機になる。この宗派は女性の権利拡大につながる教義もあり、科学的で、教育の高い進歩的女性や改宗派のユダヤ人の人気を呼ぶ。革新派たる人物像である。

スタイン夫妻は教育や健康などの最新論に沿う生活を実践し、文学や哲学の新潮流に触れる日々だった。シンドラー夫妻を彷彿とさせるが、まさに共通で、精力的に芸術活動と啓蒙・パトロン活動に関わる。サークルを広げフォーラムを主催し指揮する。前稿の女性達も自邸を開放し、社会・芸術活動

に取り組んだ姿が印象深いが、ここにも強力な女性がいた。

コルビュジエと彼らは世界が交差した。前衛絵画界の競争相手はコルビュジエの作品に住む。さらにシトロエン住宅案は投資家の夫妻の興味を引く。決定的には「エスプリ・ヌーボー」と「建築をめざして」で、パリ装飾博の「エスプリ・ヌーボー館」がさらに拍車をかける。書籍はクリスチャン・サイエンスの教義を想起させた。また物議をかもしたエスプリ・ヌーボー館は、政府内の後援者・ガブリエルの前夫の擁護で登場する。つまり環境は整っていたのである。住まい手側が従来型家族やジェンダー関係に納まらない点、芸術活動の啓蒙などのポイントが、これまでの施主像と重なり、モダン住宅誕生の女性によるキ一的役割をさらに印象付けるものである。しかし、一般に受容されるには契機が必要となる。その一つがワイゼンホフ・ジードルンクである。

III. パラダイム・シフトとしての住宅展

1927年のドイツ工作連盟主催の住宅展ワイゼンホフ・ジードルンクは、芸術監督がミス・ファン・デル・ローエ、国内外の前衛建築家17名による21棟63戸の規模で、シュトゥットガルト市の全面的支援を得て開催された。コンクリートとガラスのフラットルーフの立方体、水平連続窓、装飾を廃したホワイトボックス住宅で、後にインターナショナル・スタイルとされる住宅群である。新建築に国際的コンセンサスが存在することを明示するとともに、モダニズムが初めて集合体として姿を現し可視的となる。これまではほとんどが計画例で、実施作も散発的かつ孤立的状況だったのである。

当初の計画と相反するミースの住宅ディレクション

計画は、あくまで労働者階級と下層中流階級を念頭にされ、25年6月に、全資金を提供する市側と最初の調印がなされた。「新住宅への展望」と「現在の経済環境は、贅沢を禁じ対費用効果の最大化を求める」とある。大戦後の経済的混乱の中、住宅問題が緊急課題だった。ローコスト、新スピリット、高い居住性、という高邁な精神で始まったのである。26年1月の報道用文書には、「展示用豪華住宅ではなく、緊急なニーズに基づいた低、中間所得層用住宅」と強調された。26年12月でも、「特に配慮した小住宅。建材は限られる」とある。一貫し低中所得者用住宅、という明快な姿勢である。ところがミースは既に各建築家に、階級別4段階の住宅概要を指示していた。最上ランクは使用人2名の6居室(全10室)で、最下層は3居室、当時まだ贅沢な浴室と隣接の洗濯室が必須とされた。これに対し、26年夏には人民党から「浴室と使用人室のある6居室住宅とは、疑いなく上流カテゴリー」、開始直前の27年5月には左翼紙も「有名建築家の大部分は、住

宅危機とは聞いたこともないようだ。10 室もある住宅がモデルとは……ドイト工作連盟は多大なコストをかけて……」と述べる。

批判の矛先は計画段階からミスに向かう。仕様のみならず配置計画も揶揄され、誹り案も出る。彼を支援した工作連盟内でも辛辣な論争が起きる。連盟の言い分として、過去の暫定的住宅展とは違い終了後は賃貸される住宅として、適切な賃料収入には、豪華な構成も必要な妥協であった。

パラダイム・シフト

その原因は予期せぬ建設の高コスト化である。7 か月半の期間内での基本設計・実施設計・工事には慣例のトレードベースの入札と契約が不可能で、また高コストでもゼネコンの採用が時間的には不可欠だった。適性賃料の徴収には、対象が高所得層へシフトせざるを得なくなる。

ミスはコルビュジエに「教養ある中流階級住宅」と指示する。結果、労働者階級向けの低賃料住宅ではなく、高賃料の新奇な住宅が誕生した。それは、揶揄・反感と同時にある種の肯定感・憧憬感もかもす。また大々的な批判は右傾化の始まった政局も反映するが、擁護的空気存在ゆえである。このような過程で、刷り込みが開始されていくのである。

20 年代は確かに「新しい建築」の時代であった。しかし、国内の新竣工例は圧倒的多数が伝統的建築表現だった。30 年代でも初期は、モダン建築は中上流や中流階級の住む住宅ではなかった。オフィス・病院・工場であり、労働者階級の集合住宅と認識されていた。一般人の認識は 20 年代とさほど変わらない。しかし、このジードルンクがひとつの契機となり、パイオニアのエリート層へ新住宅デザインへの関心を招くことになる。

IV. 現代の住宅へと

■ ゾンナーヴェルト邸 (1931-33) ブリンクマン&ファン・デル・フルフト設計

ゾンナーヴェルト邸の概観

ロッテルダムの緑豊かな一隅に、ほぼ全周セットバックしたガラスとタイル張りの 1 階に、2 層のホワイトボックスが重なる。水平連続窓やフラットルーフでオフィスライクなファサードである。裏は 2F 3F と凹状の凸状テラスなどで全体に奥行きが生じ、螺旋階段が優美さを添える。内部は 1F がホールと使用人用階段と 2 寝室および書斎。2F は L 型の L.D. と配膳室、キッチン、テラス。現代と寸分も変わらぬインテリアで驚きを禁じ得ない。最新の設備機器のビルトインも特筆もので、そのゆえ多数の専門誌や家庭誌に掲載されている。中上流層の意識に、住宅デザインの地平を広げた住宅であった。

ゾンナーヴェルト夫妻の人物素描

1900 年ファン・ネレ社へ入社したゾンナーヴェルトは、頭角を現し富裕層入りを果たす。20 年代は企業の成長が著しい時代で、同社も 25 年からモダン建築の歴史的名作となる工場群を建設する。この設計者がフルフトとブリンクマンであった。ゾンナーヴェルト邸も手がけることになる。

当時の技術的文化的革新がエリート富裕層に影響を与える。海外ビジネス

が増加し、豪華客船やグランドホテルなどの体験が意識改革につながる。彼は特にアメリカ最前線で出張を通し、合理性・機能性への好みが培われる。趣味でも機械やテクノロジーを讃歌する。自邸の機器は、建築家と施主双方からのものだった。さらに運動、衛生など健康に強い関心を寄せる。旧来にはないルーフテラス、バルコニーなどアウトドアのある住宅は魅力的に映った。

同じくプラグマティックな妻には、ステイタス・シンボルへの強い憧れがあった。自家族の対外的像に神経を払う。しかし既にモダン住宅にステイタスがあったとは言いがたい。なぜ、アヴァンギャルドと見なされる住宅に至ったのか。

この地域は誰もが知るエリアで注目度は高かった。ここでの住宅取得は目覚ましい飛躍を意味する。先祖代々の資産や屋敷やアンティークを持たない夫妻の、新興階級としての地位を固めた自信と誇り、新建築の保有で浴びる注目、それが契機となる知的文化人層との新たな社交の展望、プラグマティックでテクノロジーや新しいものに対する嗜好、そして揺るぎない未来への明るい展望が、世間には無謀と映ったモダン住宅に向かわせたのである。

プラグマティックな夫妻には、プラグマティックに時機も味方する。大恐慌の間接的好影響で、住宅のプランニングに彼らの希望が反映されることになる。長引く不況は設計の仕事を減少させ、このため、設計に十分な時間がかけられ、結果、31 年 11 月には家族の希望と要求をすべて満足した案が提出されている。このような経過で、モダン住宅の定義、光、空気、空間を、ブルジョワ風に解釈した住宅が誕生したのである。すなわち、清潔でラグジュアリー、住まい心地の良さを兼ね備えた住宅である。このような住宅の出現は、モダン住宅に対する認識が変わり、共感と憧れを生む。そして、新たなライフスタイルやステイタス・シンボルの一つとしての受容に至るには、欠かせないプロセスでもある。夫妻のモダン住宅のもとには、期待どおり住宅が誘因となって、文化人エリートを含め、多くの来客が訪問している。2 人の使用人は、テーブルでは、染み 1 つないエプロンで給仕をし、144 ピースのナイフ・フォークや光沢のあるクローム家具やドアノブ磨きに精を出す。いずれも、自然光と光が一杯の室内では、手入れの良し悪しが、より目立つのである。ラディカルにモダンなアヴァンギャルド住宅内で繰り上げられる光景は、富裕層にはおなじみの、安定したラグジュアリー・ワールドであった。

参考文献

- 1) Friedman, Alice T., *Woman and the Making of the Modern house* (New York: Harry Abrams, Inc., 1997)
- 2) Kirsch, Karin, *The Weissenhofsiedlung* (New York: Rizzoli International Publications, 1989)
- 3) Joedicke, Jurgen, *The Weissenhofsiedlung Stuttgart* (Stuttgart, Karl Kramer Verlag 1989)
- 4) Laan, Barbara, *A Tailor Made Suit: The Sonneveld House* (Rotterdam: NAI Publishers, 2001)
- 5) 越後島研一「スタイン邸 (ガルシュのヴィラ)」(建築文化, 2002) その他

大阪樟蔭女子大学インテリアデザイン学科 准教授